助手を務めた。甘汞、ジギタリスなどが処方されている。

第二例　肺炎が急性増悪し呼吸・循環障害で死亡した例である。何が問題であったのか、塾生たちは病理解剖の必要性を示唆している。

第十三例「ケイゼルレーキスネチヲ」は嘉永五年（一八五二）大宮の伊古田純道の本邦第一例の帝王切開について報告しているが、寛斎自身の症例ではない。

第十六例（腹腔）内部に発する大瘍＝虫垂炎より盲腸周囲炎をおこした十三歳少女の症例。刺絡で八オンスの血を取り、患部にヒル五十匹をあて血を吸わせて切開排膿、一時は発熱して脱水、衰弱したが十一日で膿は減少し治癒せしめえた。

第二十例　泰然が執刀した乳癌（二五歳、四三歳、六十歳、四十歳）四症例。何れも麻酔の記載もなく、阿片投与の記載もない。「手術の間患者痛苦するの景況は甚しからず（ママ）…華岡者流の大毒性なる麻薬をもちうるの愚をさとる…術後三時間安眠し覚めて飯を喫すること常に異ならず」とある。麻酔なしの手術に驚愕する。

索引には人名のほか普段使い慣れた語彙や医療器具、薬剤、あるいは書籍を記載されている。あとがきには陸別町斎藤省三氏が資料を貸し出された事に謝辞を述べ、また医史学会中西淳朗先生、二宮陸雄先生の示唆に富む提言を載せられた事を付記する。

（藤田　俊夫）

〔KK　東神堂、東京都千代田区神田司町二―十四、電話〇三―三二五二―一七六一一、平成十二年九月、二一九頁、三〇〇〇円〕

浅野　弘毅　著

『精神医療論争史』

日本神経学会は一九〇二年（明治三五年）に創立されて、それが改称された日本精神神経学会は間もなく一〇〇周年をむかえる。西説による精神病学の本格的なものは、一八八六年（明治一九年）に榊俶が帝国大学医科大学で最初の精神病学講義をした時にはじまるとすると、一一五年の歴史を有することになる。一方、敗戦からすでに五六年、戦後史は精神科医療史の半分をしめている。だが、精神科医療においても戦後史は充分にととのえられてはいない。

浅野さんの『精神医療論争史』は、「わが国における「社会復帰」論争批判」と副題されている。これは『精神医療』誌（批評社）に一九九二年から二〇〇〇年にかけて、この副題を題として一六回にわたり連載されたものである。仙台市デイケアセンターで精神疾患をもつ人のリハビリテーションに従事するなどの実践の立ち場から、「社会復帰」に関する重要論争を批判的にまとめているのが、本書である。

浅野さんはまず、「リハビリテーション」の語が一般的になっているいま、ふるい「社会復帰」の語をなぜつかうのか、

のべている。「社会復帰」とは、治療の結果よくなり退院して社会適応し経済的に自立すること、と理解されてきた。「地域リハビリテーション」の見方はまったくはいっていない。こういう点を無視して、慣用されてきた「社会復帰」を「リハビリテーション」におきかえては、問題の歴史性がうしなわれてしまうのである。

第一章「作業療法の原型」は、呉秀三、森田正馬、加藤普佐次郎、そして戦後の菅修の説をのべているが、あとはもっぱら戦後に関するものである。

第二章以下でとりあげられている主題を、順次あげていこう（カッコ内は、その主たる提唱者、提唱時期、主たる論争期間である）。

生活療法（小林八郎、一九五五年、一九七二―一九八〇年）

生活臨床（臺弘・江熊要一・湯浅修一、一九六六年、一九七二―一九九四年）

地域精神医学会（江熊要一、一九六七年、一九七〇―一九八三年、学会は一九七二年崩壊）

小坂理論（小坂英世、一九六九年、一九七二年）

中間施設（日本精神神経学会中間施設に関する小委員会、一九六八年、一九六九―一九九〇年）

開放化運動（伊藤正雄、一九五八年、仙波恒雄、一九七七年、一九七八―一九八六年）

地域リハビリテーション（一九七〇年代後半にはじまる、一九七九―一九九六年）

やどかりの里（谷中輝雄、一九七〇年、一九七四―一九九六年）

精神障害者福祉法（全国精神障害者家族会連合会、一九八〇年、一九八〇―一九八五年）

障害構造論（蜂矢英彦、一九八一年、一九八四―現在）

生活技能訓練（安西信雄ほか、一九八九年、一九九四年点数化、一九九五―一九九七年）

分裂病の「回復」と「治療」（伊藤哲彦、一九八八年、八木剛平、一九九三年、など）

さて、「おまへはなにをしてきたのだ」とふきくる風にとわれれば、やはり寒さに頸をちぢめざるをえない。これらの論争のいくつかに、わたしもすこしはかかわってきている。戦後をいきてきた精神科医のだれもが、論争に直接くわわらなくても、これらのいくつかを実践しようとしてきた。といって、これらの論争がきれいにかたづいてはいない。なかでも、小林八郎が生活指導（しつけ）、レクリエーション療法、作業療法の統合として提唱した生活療法は、批判されながらも今日の精神科病院にしぶとく根づいている。生活技能訓練として点数請求されながらも、生活療法の残渣であるものもある。

精神医学は生物学的方向にかたむいたり社会学、心理学によったり、考え方の振幅がおおきい。なかでも、精神疾患をもつ人の治療・福祉をめぐる考え方は、収容から生活へと基本的な考え方の枠組みがおおきくかわっているだけに、論争もはげしかった。

浅野さんの今回の試みは、戦後精神科医療史をみていく確乎とした一軸を提供している。希望をいえば、論争の経過図のようなものをつけてほしかった。そうすれば、時代の流れのなかでの論争の位置づけがよくわかるからである。じつは、論争主題の下のカッコ内にいれたものは、浅野さんの叙述からわたしがぬきだしたものである。さらに注文をつければ、人名索引もほしい。時代の主役、脇役がパッとうかびあがるからである。

いずれにせよ、戦後精神科医療史をみていくための、そして今後の精神科医療の方向をみさだめていくための好著としてこれをおしたい。このところの生物学的精神医学の進歩は目ざましく、分裂病の病因・病態発生が解明されつくし、治療法もちかく確立されるだろうとの幻想さえいだかせる。だが、先進国中最高の精神科病床をもちつづける日本にとって大事なのは、精神疾患をもつ人をどう治療していくか、その人たちがいきる場をどうととのえていくか、そのおおきな社会的枠組みを構築していくことなのである。

（岡田　靖雄）

〔批評社、文京区本郷一―二八―三六　鳳明ビル一F、電話〇三―三八一三―六三四四、平成十二年十月十日、B六判、二一一頁、本体価格二〇〇〇円〕

岡田　靖雄　著

『精神病医　斎藤茂吉の生涯』

斎藤茂吉は、「学校および病院の先輩であった精神病医」であり、「茂吉っっぁん」とも呼ばれるのも聞いて、「近所の小父さんという親しさもいだいてきた」という著者でなければ書けない本である。

精神医療史研究者である著者が、呉秀三の業績を調べているときに、斎藤茂吉の日記を読んで衝撃をうけたことが、この本の発端になっている。

その後、二十数年のあいだあたためつづけてきたテーマが、ここに結実した。

歌人として名高い斎藤茂吉を、精神病医として、いまどう評価すべきか。

呉秀三の弟子としては、森田正馬、下田光造のような一流の精神医学者ではなく、三宅鉱一、植松七九郎のように精神衛生運動をひきついだ活動に貢献することは少なく、斎藤玉男のように新しい精神病院をめざそうとしたのでもない。

また、義父斎藤紀一のように、病院経営に秀でていたのでもないのである。

しかし、その当時、精神病医として最良の教育をうけ、教授として留学し、また婿として、病院をひきつぎ、日本が最も苦しかった時代を、誠実な精神病医として過ごした生涯は、評価されるべきである。